
魔法少女リリカルなのはStrikers ～天空を舞う銃騎士～

デフォルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers ～天空を舞う銃騎士～

【Nコード】

N5173P

【作者名】

デフォルト

【あらすじ】

何もない、空虚な空間に独り佇む青年。

その耳に聞こえてくるのはぶつ切れの《声》だけ。

《声》に導かれるも、何もわからないまま気を失い、次に目を覚ました場所は、蒼空^{そら}。

その眼下には戦う少女たちと、突如としてそこへ現れる黒い異形たち。

それらとの出逢いは青年に何を齎すのか……。

プロローグ（前書き）

皆さん、こんにちは。或いはこんばんは。

（もしかしたら）初めまして、デフォルトという者です。

えゝ、第一作目も完結しないうちに新作書きちゃいましたゝ、T E
H E ♪（↑オイ

いや、まあ、一作目が微妙に煮詰まってまして、気分転換にと
書いてみました♪

ただ、一応連載扱いにはありますが。

試験的に書いてみたただけなので、実際に続けるかどうかは読者の皆様方の反響次第ということになります。

そういう訳なので、感想欄にでも皆様のご意見をいただければ、
と思います♪

あ、勿論、個人的にメッセージボックスへ送っていただいてもOK
です♪

長くなりましたが、本編、どぞ♪

プロローグ

・・・ここは、どこだ

・・・は、だれだ

何も、見えない

何も、感じられない

なんだ？ ……の中に、何かが入ってくる？

これは、記憶……………なのか？

あ…………、誰かが戦ってる？

なんだ？ あの黒いのは…………

《それこそが、あなたが…………べき…………です。……………》

っ！？ 声？ 誰だ！

どこにいる！？

《落ち着いて、……………。今のあなたには私を見ることは叶いません》

なんだと？　おい、どういう意味だ
それにあんたは……

《ここはいわば……………。私は……………。そしてあなたは……………》

……？　おい、肝心な部分がまるで聞こえないぞ！

《今、お見せしたのはとある……………での出来事。
そして……………が……………めています》

おい、聞こえないと言ったのがわからないのか！？

《あなたには……………を……………ために……………て……………ねばなりま……………》

くそっ！　こっちからの声は聞こえてないのか？

《その上で……………てほしいのです。あの……………のを……………うべきか、
或いは……………べきかを》

……に、なにをさせるつもりだ……？

《そのための力を、あなたに……》

……光？ 銃？

《では――》

待ってくれ！ ここはどこだ！？
あんたは誰なんだ！？

……は――！

オレは誰なんだ！！？

《また、いずれ逢いましょう、私の……しい……》

待て！

待って、

く、

れ………

………こうして、なにひとつとしてわからぬままに、オレの意識は闇に吞まれていった………

ブログ（後書き）

前書きにも書きましたが、ご意見、ご感想、お待ちしております。

ちなみに期限ですが、とりあえず一週間後の12月22日（水）までを予定しています。

それでは、ノシ

第一話 それぞれの“初陣”（前書き）

はい、どうも♪

え、期限切れからちと（？）経ってしまいましたが、更新です♪
結論から申し上げるとさしたる反響はありませんでした。が、プロローグだけでは判断に困る、という旨のご意見を頂戴しましたので更新です♪

相も変わらず面白みに欠けるかと思いますが、一言だけでも構いませんので、感想、ご意見をお待ちします。

では、本編どうぞ♪

第一話 それぞれの“初陣”

第一管理世界 ミッドチルダ 山間部上空

……ここは？ オレは……。そうか、気を失ったんだ……。

くそっ、あいつは何なんだ！ 何で何も教えない！？

……………ん？ あいつって、誰だ？
それに教えないって、何を？

まあ、いいか。

そつえばさっきから妙だな。浮遊感というか、落下感に包まれてるような……………。

不審に思っただけと閉じていた目をそっ、と開けてみる。

すると彼の目に飛び込んできたのは。

「………空？」

そう、空。よく、真綿のような雲が浮かんでいる、と比喻される、
誰しもが知っている、空。

……何で？

何で空なんか仰いでいるのか。その事実、自分の身体を包む不思議なこの感覚に関するのか。

そう思い、ふと。何の気なしに背後……すなわち地面の方を、
頭を僅かに傾けて視界に収める。

常識的に考えれば、すぐ目の前に赤茶けた更地のような地面が、或
いは草の生い茂った草原があるはず。

だが、今、彼の目に移っているそれは、一面の、白。これはどうひ
いき目に見ても、更地でもなければ草原でもない。

「……………」

予想外のことに思わず顔を顰めたその瞬間、一気に視界が開ける。

その眼下に見えたのは、当初予想していた“赤茶けた更地のような”地面。

「……………え？」

再びの予想外……或いは想定内……のことに脳の思考回路がフリーズする。

だが、時間までは止まってはくれない。

徐々に、しかし確実に近付いている地面。その意味するところとは、つまり。

……オレ落ちてる！？

と、いうこと。

そう、どんなモノであろうと、重力から逃れる術は無い。そして先ほどの一面の白……すなわち雲。

そんなものと同等の高度から落ち、地面へと激突すれば、待っているのは確実な……

-
-
死。

そのたった一言が。 たった一文字が。 目を醒ましたばかりの青
年に重く押し掛かる。

「死……。 死ぬのか、オレは？ 何も、なんにも……………」

何もわからないまま？

自分が誰かもわからないまま？

嫌だ……。

嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。

嫌だ。

嫌だ。

嫌だ。

嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ……。

そんなのは -
-
-
-

そんなのはイヤだ！！！！！！！！

『……ならばその手に握り締めて私の名を呼んでください。そして言うのです、セットアップ、と』

「……………え？」

極めて近い位置から掛けられた女性の声に、彼の思考は三度フリーズする。

だが、その腕だけはまるで何かに導かれるように、首にかけられた深い藍色の宝石が埋め込まれたネックレスへと伸びる。

「お前、なのか…………？」

『はい。さあ、早く！ 時間がありません！ 私の名は…………』

「お前の、名は…………！」

不安定な姿勢からなんとかもの言う宝石を握りしめ、脳裏に浮かんだ名を、ありったけの力を込めて叫ぶ！

「ストレイフェザー!!!」

『Standby ready』

「セットアップ!!!」

『Set up!』

その瞬間、青年の身体は深い蒼に輝く光に包み込まれていく。

「あれは……?」

地表が眼前へと迫る中、完全に包み込まれる瞬間、青年は眼下に幾つもの光芒が瞬くのを見た気がした。

『サー、魔力反応を感知しました』

「え!？」

眼前の機械――ガジェット数体を、大鎌に変形させた愛機、バルディッシュ・アサルトで切り裂くと同時、耳に入った報告にその持ち主。

フェイトⅡⅡハラウンは目を見張る。

『上です!』

自分の周囲のガジェットは掃討し終えたため、その言葉と共にフェイトは上空を振り仰ぎ、バルディッシュを構える。

その瞬間!

「きゃっ!」

『Master!』

「だ、大丈夫。それより今のが？」

『S i r .』

バルディッシュの言うとおり、確かに遙か上空に蒼い魔力光が見えた。かと思つた次の瞬間には自分のすぐ近くを高速で落下し、もはや豆粒程度の大きさでしか視認できない程遠ざかっている。

追うべきか――一瞬、逡巡するもすぐに行動に移す。

「バルディッシュ。予定変更、あれを追うよ。方角的にFWの子達とぶつかる」

『S i r .』

どのみちFW達の援護に向かうつもりだったのだ。追跡しようと問題あるまい。だいぶ距離が開いたが、自分のスピードなら追い付ける。

ただ、と追跡を開始しながらフェイトの脳裏に不安がよぎる。

もしこれが何者かの――第三者の同時多発的な組織的襲撃であれば、なのはやりニアトレインで戦っているFW達は二つの勢力を相手にせねばならない。

なのはなら遅れを取ることはまずないだろう。が、FW達は三つ巴の戦闘の経験がないため、追い詰められ、最悪、

落とされる危険がある。

逆に、それがガジェットをけしかけた者であれば、恐らくは指揮官クラス。

乱戦は回避できようが、苦戦する事が予想される。

どのみち、未だ発展途上のFW達が相手取るには荷が勝ちすぎる。それに――

そんなことを考えながら空を翔ていると、

『フェイトちゃん！ さっきの魔力反応だけど、もしかしてそっち行っただけ？』

『なのは！ うん、すぐ近く。“レリック”が狙いかも知れないから今追っつてるとこ』

『じゃあ、そのまま追跡お願い！ 私もすぐ行くから！』

『了解！』

そう。今、自分達“機動六課”が追っているロストロギア“レリック”を、ガジェット達もまた、狙っているのである。

ロストロギアとはその名が示すとおり、古に栄えた文明が創り出したモノ、その総称なのだ。

用途はそれぞれ、様々あるのだが、いずれも現代の技術ではその有り余るエネルギーを扱うのは困難とされている。

故に、まかり間違つてその存在を知らない者や犯罪者達の手に渡らないよう、フェイトらが籍を置く“時空管理局”が探索、及び管理、保管をしているのである。

- - - 閑話休題。

とにかく、“レリック”がガジェット、ひいてはそれを操る者の手に渡ることは防がねばならない。
先の蒼い光を放つ者もまた然り。

なのはからの念話を切り、自分のすべきことを再確認したフェイトは前を見据え、ひたすらに蒼空を翔けた。

機動六課FWの一人、スバル・ナカジマは困惑していた。

今、彼女の目の前にいるのは一人の青年。長身瘦躯、ざんばらに伸ばした白銀の髪に膝丈の紺のコート。

スバルに対して背を向けているので顔は判らないが、その右手には鈍く輝く黒銀の銃 - - - 恐らくはデバイス - - - が握られている。

そこまではいい。いや、よくはないがいい、ということにしておく。

なぜなら、その更に向こうにいる黒い異形達に比べれば些細な問題だから。

青年と異形達が対峙する中、スバルは何か起きたのかを思い出すため、必死に記憶の糸を手繰り始めた。

- - -

- - -

-

それは僅か数時間前の事。

スバル達が所属する機動六課FW陣は教導官、高町なのはの下、彼女の課す訓練に日々、明け暮れていた。

そしてまさに今日この日、彼女らは各々のために造り出されたデバイスを受け取ったのだ。

新たな相棒^{パートナー}を得て喜ぶFW達四人と、それを微笑ましげに見守るデバイスの開発関係者達。

そんな彼女らの雰囲気^{雰囲気}に水を差すように警報が鳴り響く。

突然のことに目を見張るFW達とは対照的に、なのはは落ち着いていた

様子で彼女の傍らに出力したモニターの中の人物と話をしている。

何事かと見守る四人に、会話を終えたなのはが振り返って事態を告げる。

それは、現在山間部を走行中のリニアトレインが運搬している貨物の中に、レリック反応が検知された。そしてそのレリックに反応してガジェット部隊がリニアトレインを襲撃している。

前線メンバーは、ガジェット部隊を掃討し、かつレリックを確保してほしい、というものであった。

かくして初出撃となったFWの四人は、空をなのはと、途中で合流したフェイトに任せ、リニアトレインの内外から進撃。

途中、幾度かトラブルに見舞われながらもガジェットを殲滅し、なんとかスバルがレリックを確保したのだ。

が、ホッと安堵しかけたその矢先、突如目の前の空間が歪んだかと思つと、その歪みを引き裂き、這いずり出るようにして全身真っ黒な異形が現れたのだ。

それも一体や二体などではない。

後から後から、まるで虫が湧くようにして現れ、あっという間に数十体にまで膨れ上がったのだ。

あまりに予想外な出来事に我を忘れて硬直するスバル。

その虚を突くようにして先頭にいた異形の数体がその紅い双眸をギ

うつかせながら飛びかかる。

同時、マッハキャリバー相棒が自分を叫ぶようにして呼ぶも、我に返った時には既に目の前。

回避も防御も間に合わない。

- - - やられる！

心の中で悲鳴を上げ、反射的に目を瞑る！

直後何かが潰れるような音がスバルの耳朵を打ち、続けて目に見えない波動がその身を襲う！

やられた？ …… その割にはどこも痛くはない……。

恐る恐る力一杯閉じていた目を開け - - -

-

-

-

-

-

-

そして今に至るのだが。

記憶に間違いがないか、もう一度思い返してみる。

……うん、間違いはない。そしてわからない。

なにがわからない、なんてことは言わずもがな。目の前に見知らぬ青年がいる事と、自分が助かった理由、この二つに尽きる。

状況から考えてこの青年に助けられたのだろうか……。

何か他に手掛かりは、と周囲に視線を彷徨わせると、ある一点に目が止まる。

天井だ。天井に大きく円上に穴があき、その真下に件の青年が。

…やっぱりこの人が？

…でも、なんで空から？

…声、掛けてみようかな

そう決心し、おずおずといった様子で口を開く。

「あ、あの……」

……

……靴底から感触を感じる。
どうやら着地には成功したらしい。

完全に光に包まれてから閉じていた目をゆっくりと開けてみる。

そして一番最初に目に入った光景は――

血のように紅い双眸の異形達がこちらを睨めつけているというものだった。

「あ、あの……」

「おい、これは何の冗談だ？」

「え」と……」

『残念ながらそういった類のものではなさそうです』

声を掛けるスバルを無視して話を進める青年。

「なら、こいつらは何なんだ？」

「あの……」

『分かりません。 ですが一つだけ言えることがあります』

「見当はつくが、何だ？」

『それは……』

「あの！」

痺れを切らしたスバルに反応したかのように、今まで黙っていた異形達が俄かにざわめき出す。

そして……

『……あなたが討つべき敵です』

「だと思ったよ……！」

呻くようにしてトリガーを引き絞ると同時、異形達が一斉に飛びかかった。

第一話 それぞれの“初陣”（後書き）

忌憚なきご意見、感想をお待ちしてます♪

では♪

第二話 舞い落ちた“羽根”（前書き）

皆様、お久しぶりでございます m（―――）m

えゝ、例の大震災の後、活動を自粛しておりましたが、本日を以ちまして再開したいと思います。

では早速本編どうぞゝ

第二話 舞い落ちた“羽根”

ミッドチルダ 山間部 上空

真っ白な雲がたなびく空を、地表へ向けて長い尾を引きながら翔る桜色と金色のふた筋の光。

その主たる二人の人間は対照的な色の衣服を纏っている。

桜色は全身白く、金色は黒い。 そのうちの全身白装束の女性が、どこか幼さの残る声でもう一方に話し掛ける。

『……で、フェイトちゃん。他に何か可能性はある？』

『ううん、特には。 なのははどう？』

フェイトと呼ばれた黒衣に白いマントを羽織った女性は軽く目を瞑り、首を横に振ると、逆に問い返す。

それに白装束……高町なのはもまた、首を横に振る。

『多分、フェイトちゃんが考えてるそのどっちかだと思う。で、仮に第三者だった場合、その人？ の狙いが本当にレリックなのか、っていう疑問は残るんだよね』

『つまり、偶然この場に居合わせた、って事？』

その問いに今度は首肯するなのは。 それを見て、一理ある、とフェイトも思うが、そうなる今度は別の疑問が浮上する。それは、

『レリック狙いでないなら、何でこんな所にいるのかな？』

『うん、それなんだよねえ……』

フェイトの呈した疑問になのはが嘆息気味に答える。

――あの後、ほどなくしてガジェットを殲滅したなのはが合流し、こうしてトレインに向かいながら“蒼い光”についてお互いの考えを交換しているのだが、これ、という答えを導き出せてはいない。

もともと“それ”についての情報など一つとしてなく、接触もフェイトがごく短時間――それこそ瞬きする間の出来事だったのだから無理からぬ事ではあるが。

その後ひとまずFW達の援護を最優先とし、念話を切り上げた二人の視界に、山間に停止しているリニアトレイン……正確には後部車両の天井にぽっかり開いた穴が映る。

なのはは目標を前に一旦止まり、先程から連絡の取れないFW達を案じて今一度念話をしようと試みるが、やはり繋がらない。それはフェイトも同様らしく、口惜しそうに唇を噛んでいる。

「フェイトちゃん……」

「大丈夫、行こう?」

軽く肩を抱いたなのはに頷き、先行する形で前へ進むフェイト。と、その時!

「くっ!?!」

大気を切り裂くように極太の、空より深く、海よりは淡い、蒼い光砲が二人の横を掠める!

「砲撃!? スバル、じゃない……」

「なのは、あれ!」

驚くなのは横、フェイトの指差す先には――

「男の………人？」

未だに蒼い燐光を撒き散らす銃口をこちらに向けた青年が、そこにいた――

リニアトレイン内部

「ああ、もう！　なにしてんのよ、あのバカ！！」

鉄屑と化したガジェットが方々に転がる薄暗い車内に刺々しい声が反響する。

「いつもいつも振り回されるこっちの身にもなれってのよ！」

「お、落ち着いてください、ティアさん………」

「まだガジェットと戦ってるのかもしれませんが…」

声を荒げる少女、ティア……ティアナ・ランスターを宥めるように、傍らの少年少女、エリオ・モンディアルとキャロル・ルシェがおっかなびつくりといった風情で声を掛ける。

「っと、冷静さを欠いたわね。ごめん」

「いえ、それよりスバルさん無事だといいいんですけど……」

「念話も繋がらないし、ちょっと心配です……」

バツが悪そうな表情で謝るティアナにエリオは恐縮したように、キャロは不安げに答える。

「とにかく、早くスバルのところに行くわよ」

『はい！』

冷静さを取り戻したティアナに付き従うようにエリオ、キャロも走り出したその時である。

「きゃー！」

「キャロ！ … 大丈夫？」

突如列車全体を襲った揺れに耐えられず倒れ込みかけたキャロと、それを支えるエリオ。

それを横目に自身は片膝をついて揺れに耐えたティアナは内心で舌打ちする。

（何なのよ！？ 念話は繋がらないし変な揺れは起きるし！）

愚痴を零したところで仕方がないとは解っていても、この状況ではそうしたくもなってしまう。

そんな自分に喝を入れ、揺れが収まった頃合いを見計らって立ち上がると、後ろにいたエリオとキャロを見やる。

「二人とも無事ね。 とりあえず当初の予定通りスバルと合流してレリックを確保。 その後はなのはさん達の到着を待つ。 いい？」

『はい！』

前を向くと同時に返ってきた明朗な返事を背に受け、ティアナは走り出す。

相棒の無事を祈りながら…

（今行くからね、スバル……！！）

同刻 リニアトレイン内部

『マスター！ 正面、来ます！』

「わかってる！」

デバイスの警告に右手側に向けていた銃口を正面に引き戻し、トリガーを引き絞る。

『フェザントステインガー』

電子音声と共に瞬時に形成された一発の蒼い円錐形の魔力弾は、放たれるや目にも止まらぬ速度で異形を穿つ。

蛇のような真つ黒なそれは、体躯の中程にある紅い核を貫かれ霧消していった。

「よし、次！」

『絶好調ですね、相棒！　　左から来ます！』

その横でもまた一体、倒れ伏した狼のような異形が消えていく。

その傍らに立っているのは青く短い髪に活発そうな双眸が印象的な少女、スバル・ナカジマだ。

レリックの入ったケースを小脇に抱え、両脚を巧みに使って蠍じみた異形を蹴り飛ばす。

「つて、ウソ！？」

だが、蠍はハサミを失いながらも空中で回転。

体勢を整えて着地をすると反転し、失った方のハサミを振りかぶって――

――ぐしゃり

「――なに？」

「仲間を……刺した？」

青年とスバル。二人して予想外の事態に呆けている間にも、件の蠍は手近にいた狼型や蛇型をも自らの尾やハサミで突き刺し、時に喰らっている。

しかもそれだけではない。

「気のせいかな？　なんか、大きくなってない？　マツハキヤリバ
ー……」

『決して気のせいではないようですよ、相棒』

そう。まるで自身の糧にでもするかのように、周りの個体を取り込む端からその体躯を巨大化させていくのだ。

そしてあらかた喰らい尽くした蠍型はその食欲さをスバルに向ける。

『プロテクション！』

「っ、お、重い！」

咄嗟にマツハキヤリバーが展開したバリアで尾針による突きを防ぐが、接触面から徐々に罅が入っていく。

更に、その間にもまだ残っている異形達が我先にとスバルに取り付こうとする。

『マスター、あの少女が！』

「ちい！ 洒落臭い！！」

今ここで情報源となりうる存在を失うわけには行かない。

そんな判断からスバルに群がる異形に銃口を向けざま、立て続けにトリガーを引く。

だが多勢に無勢、如何に単発の威力が高かろうと一体ずつ潰していても埒が明かない。

（火力は問題無い。 だが手数が足りない……！）

劣勢な現状に歯噛みしているうちに、持ち前の頑丈さで強引に包囲網を突破したスバルが青年の近くに転がるようにして駆け込んでくる。

その身体にはいたるところに傷や痣があるが、なんとか意識は保っているようだ。

「タフなヤツだ……」

「そ、それが取り柄ですから……」

軽口をたたきつつ。内心舌を巻きながらもトリガーを引く手は止めない。そうした瞬間押し込まれるのは明白だからだ。

舌打ちしたいのを堪え、怒鳴るようにしてデバイスに問い質す。

「なんか打開策はないのか!？」

『……あるにはありますが、今のマスターに扱いきれるかどうか……』

「やらないよりはマシだ!」

『……わかりました。では……。その貴女、きついかなとは思いますが少々時間をください』

「え、ええ!？」

先の融合を免れた狼型の突進をギリギリ避けたスバルが驚きのあまり声を張り上げる。

「ちよっ、ちよっと待って……」

『リミッター1、解除。コード入力、干渉開始』

「~~~~~!」

返ってきた抗議もどこ吹く風、とばかりに受け流すような音声が車内に木霊したその刹那。

青年の目の前の空間が歪み始める。

『アトラクター、展開完了』

『バイパス、接続完了』

『各コンバーター、異常なし』

異形達を蹴散らしながら横目に見たその光景に、スバルは時間稼ぎも忘れて思わず見入ってしまう。

「あれは……」

――あれは確か異形達が現れたときと同じ空間の歪み方ではなかったか……？

呆然と突っ立つスバルを尻目に、青年の手に収まっているデバイスは次々と何らかのシーケンスを消化し、そして――

『システムオールグリーン。マスター、その歪みの中に手を』

「え……？」

二度驚くスバルを無視し、青年は歪みの中に臆することなく空いている左手を突っ込む。

《……………！！》

直後、スバルに群がっていた異形達が、それまでが嘘のように声無き声を上げながら牙を、爪を、青年に突き立てんと踊るように迫る！

だが――

《……………！？》

そこに青年は――居ない。まるで道標を失った蟻のような戸惑いを見せる異形達。

だが、鼓膜を震わせる電子音声に斜め後ろ――則ち死角からの声に一樣に振り向く――と。

『チャージ完了。 エメト・ブレイザー……………』

「ダブル・シュート！！」

トリガーを引くと同時、黒銀の双銃から放たれた蒼い光の奔流は異形達を瞬く間に呑み込み、列車の側面に大きな風穴を空け、山肌を抉って蒼空へと消えていった。

-
-
-
-

『スバル！！』

「あ、なのはさん！ それにティア達も！」

車外からなのは、フェイトが。車内からはティアナ、エリオ、キヤロが。それぞれスバルの名を呼びながら駆け寄ってくる。

「とにかくみんな無事で良かったよ。レリックも確保できたし言うことないね。でも、スバル。その怪我相当無茶したんでしょ？ ダメだよ？」

「あ、はは……。ごめんなさい……」

「まあまあ、それくらいにして。ところでスバル。さっきから

気になってたんだけど、その人って――」

スバルを窺めるなのはを宥め、フェイトは視線をスバルの横。より厳密に言えば“その人”――スバルが肩を貸している青年に移す。

そんな彼の素性が気になるのか、一同も青年に視線を注ぐ。

年齢は17、8、身長は180はあろうか。ざんばらに切られたやや長い銀髪に色白で整った顔立ち。

バリアジャケットが解除された現在は薄手の黒いインナーと上着、青いジーンズと比較的カジュアルな服装である。

今はその瞼は閉じられ、グッタリと脱力してスバルに肩を預けている。

と、言うのも先の砲撃を放ち、異形達を倒した後、まるで糸の切れた人形のように倒れてしまったのだ。

そしてスバルが介抱して現在に至るのだが――。

「わかりません。ただ、黒い怪物みたいのが現れた後、空から降ってきて――」

首を振り振り、そういうスバルに彼女以外のFWは怪訝そうだった。驚いた顔をするが、隊長二人はもしかして、と顔を見合わせている。

「……とにかくみんな、今日はお疲れ様。隊舎に帰るまでが任務だから気を抜かないようにね。それとこの人は医務室に預けて目を覚ましたら私達から話を訊いておくから。後は……」

テキパキと指示を出すのはに従い、FW達はヘリへと乗り込んで行く。

最後にフェイトが搭乗し、ハッチを閉めたヘリは徐々に高度を上げ、やがて機動六課へ向けて飛んでいく。

未だ名も知らぬ青年を乗せて……

何処とも知れぬ空間。

一切の光の存在を許さぬ、闇。

一寸先も見えない真つ暗闇。

そんな中に響く微かな――声。

まるで詠うように――

切なげに

哀しげに

沁み渡るように

響いていく

《…… 賽は、投げられました》

《後は全て、貴方次第》

《ただ、願わくば……》

《―― 貴方の前途が光溢れるもので、あらん事を……》

《私が願うだなんて―― おかしな話、ですね……。でも、そうせずにはいられない……》

一切の光の存在を許さぬ、一寸先も見えない真つ暗闇に、そんな切なげな、哀しげな声だけが響いていた――

第二話 舞い落ちた“羽根”（後書き）

はい、てなわけで随分お待たせした第二話をお届けしました♪

また次回もお会いできることを祈りつつ。

ではでは♪ ノシ

第三話 新たなる“日常”（前書き）

はい、読者の皆様お久しぶりでございます♪

またも1ヶ月近くお待たせしてしまいました（汗）

まあそこはそれ、デフォルトクオリティーって事で一つ……、あ、無理ですか？

と、ともあれ、本編どうぞ♪

後書きにてアンケート実施してますのでそちらも宜しくです♪

第三話 新たなる“日常”

規則正しく並び立つるビル群。 その合間を滑るように飛ぶ、青いカプセル状の機械。

それらが6つ、好き勝手な方向へ進んでいく。

その光景を“誰もいない”ビルの屋上から見つめる青年が一人。

『数は6。 まあ、妥当でしょうね』

「ん〜。 けどその分個々の性能は引き上げられてるらしいな」

『だとしても私のサポートがあれば問題ありませんよ。 自信を持って行きましょう』

「……ま、頼りにはしてるぞ」

そう言つて青年……ざんばらに切られたやや長い銀髪に翡翠色の双眸を持つ青年は、ビルの縁に足を掛ける。

そして……

「ストレイフエザー、セットアップ！」

『スタンバイ レディ、セットアップ！』

ビルから飛び降りると同時、蒼い光に包まれた――。

時は数日前の早朝にまで遡る。

-
-
-
-
-

カーテン越しに差し込む眩いばかりの朝日に目を灼かれ、うつすら

と瞼を開ける。

「う、……うん？　ここ、は……？」

まず視界に入ったのは清潔感漂う真っ白な天井。次いで鼻を突く消毒液の臭い。

どうやら自分は医療に関係した部屋に居るらしい。

そこまで分かったところで頭と視線を動かす。

向かって右手側に窓。道理で眩しいわけだ、と納得しつつ左手側に視線を転じると仕切り代わりのカーテンで閉ざされている。

「とりあえず起きてみるかなっ、――と……」

誰にともなく眩きながら掛け布団を押しつけて上半身だけを起こし、再度辺りを見回してみる。

「う……ん……」

悩んだ末に仕切りを取っ払ってしまおうとカーテンを掴み、横に引っ張る。

シャッ、と小気味良い音と共に視界が開けると同時、入り口のドアが音を立てて開き、室内にひとりの女性が入ってくる。

「あら、おはよう、目が覚めたのね」

そう言って近寄ってくるその女性を、どうも、と会釈しつつ観察してみる。

年齢は20半ばくらい、肩口で切り揃えられたオフゴールドの髪に柔和そうな顔立ち、ほっそりとした体を被うように白衣を着用している。

出で立ちからしてどうやら彼女に看てもらっていたらしい。ベッド脇の椅子に座りながら具合を訊ねてくる女性に悪くない、とだけ返し、ここはどこなのかと問い返す。

果たして、返ってきたその答えに――

「――……時空管理局？ 機動六課？」

案の定疑問符が浮かんだ。

そんな青年の様子に苦笑しより詳しい説明をしようと、シャマルと名乗った女医が口を開く、と。

――コンコン

「失礼しまゝす……。あ、目が覚めたんだ！ 良かった」

「……バカスバル、返事も待たずに入ったんじゃノックの意味ないじゃない、まったく。あ、おはようございます、シャマルさん」

「おはようシャマル。お、その人目え覚ましたんか。思ったより元気そうやなあ」

「おはよう、スバル、ティアナ。はやてちゃんも」

三人の少女が口々に朝の挨拶をしながら医務室へと入ってくる。

「……あんたらは？」

「ん、自己紹介しよか。私はこの機動六課総部隊長を務めてる八神はやてです、で、こっちは……」

「機動六課FW、ティアナ・ランスターです」

「同じく機動六課FW、スバル・ナカジマです。昨日は助けていただき、ありがとうございました！」

青年の尤もな疑問に、八神はやてと名乗ったショートカットに茶髪の少女に視線で促され、その背後に控えていた二人も自己紹介をしてくれる。

ティアナという橙に髪をアップサイドにした少女は初対面だが、その横の青い髪のスバルというボーイッシュな少女は……。

「確か、一緒に戦ったんだよね？　そういや、怪我は大丈夫なのかな？」

「はい、全然問題ありません！　……覚えてくれたんですか？」

純粹に驚いたのか、嬉しそうな顔から一転、意外そうな表情をするスバルにそりゃあな、と苦笑する。

「ところで、なんですがそろそろ名前教えてもらってもいいですか？」

と、頃合いを見計らったように青年にはやてがそう問うとやや間を空けてあゝ、とかうゝ、とか唸りながら頭を掻き毟り始めた。

その、ある意味いきなりな行動に驚きながらも、一同を代表してシヤマルが問いかけてみる。

「もしかして思い出せない、とか？」

「いや、ここまで出掛かってるんだけど……。ア……、違うな。

……マ、マ……」

今度はアーでもないマーでもない頭を抱えて悩み出した青年を呆然と見つめること暫し。

「…………マグナ」

『え？』

「思い出した……。マグナ・シグザウエル。それが俺の名前だ」

ポツリと、青年……マグナは呟くようにそう名乗った……

-
-
-
-

「なるほど。名前以外は思い出せへんか」

「ああ、すまない」

そう言ってうなだれる青年ことマグナ。だがこればかりはどうし

ようもなく、居合わせた一同は気遣わしげである。

「うーん。記憶喪失なら身寄りがあるかも解らんし、マグナさんさえよければこっちで面倒見ますよ？」

沈黙が場を支配する中、そんな空気を払拭しようと殊更明るくはやてが提案する。

それはマグナにとってみれば望んでもないことである。が――

「いいのかよ？　どこの馬の骨とも知れないんだぞ、オレは」

「いいもなにも、右も左も分からん人を放り出すようなマネはできませんよ」

「それに管理局のお仕事にはマグナ君のような次元漂流者を保護することも含まれているの」

訝しげに訊ねるマグナではあるが、それとは対照的にあっけらかんとはやてが言い放ち、それを補足する形でシャルが続く。

「それはありがたいな。……で、次元漂流者ってのは？」

「簡単に言えば何らかの要因で自分のいた世界から別世界に跳躍とばされた人のことよ。信じられないかも知れないけど」

「ふゝん……」

「ふ、ふゝん、て……」

「なに悠長にしてるんですか。 帰れないかもしれないんですよ！？」

「え、なんで？」

「何でってそりゃあ……」

返ってきた答えに目を丸くしつつティアナが説明する。

曰く、管理局が文字通り管理している世界なら調べさえすれば -

- 手続きは必要だが - 帰ることは可能である。

しかし次元の海は広大であり、管理局でも全ての世界を把握しきれ
ている訳ではない。 もしマグナのいた世界がそんな世界 - - す
なわち未発見の世界だったら探し当てることはきわめて困難である。

それ以前に、マグナが記憶を取り戻さないことには探すという行動
自体とれない。 もしかしたら一生思い出せないかも知れないのだ
から。

「なるほど、な。 ……ところでなんで俺が、その次元漂流者だ
って解ったんだ？」

元いた世界への帰還が絶望的とわかりさすがに落胆が隠せないマグ
ナ。

その落ち込みようにまたも沈黙する一同に気を遣って、新たに話題を振ってみる。

「えっと、マグナさんが落ちてくるちよつと前に次元震があったそうなんです。　マグナさんが現れた時間的にも一致するから・・・」

「だから次元漂流者だと判った、と」

スバルの説明の後を継いでそう言うマグナに頷く一同。　それによって漸く自分の置かれた状況が把握できたのか、得心がいったように何度も頷いている。

「じゃあ、今後俺はどうなる？　或いはどうすればいい？」

「それはある意味マグナさん次第です」

「・・・というと？」

「管理局で面倒を見てもらって記憶が戻った段階で元の世界に帰るか、ここ・・・ミッドチルダに残って一般人として生きるか。　もしくは・・・」

そこで一旦口を閉じたはやてを訝しみながら続きを促す。

「もしくは・・・なんだ？」

「……もしくは、囑託魔導師として私らに協力してもらうか、です」

「……………シヨクタク、マドウシ？」

そう、どこか言いにくそうに答えたはやてに、マグナは本日何度目かも分からない疑問の声を上げるのだった。

- - - - -

- - -

-

- - 囑託魔導師

それは一言で言えば正規の管理局員とは違う、民間からの協力者のことであり、

ひとつ、筆記。

ひとつ、儀式魔法。

ひとつ、実技。

以上、三つの試験をパスして漸くそれと認められる。決して狭き門、というわけではないが間口が広いというわけでもない――

という説明をベッドから解放されたマグナ・シグザウエルは、六課隊舎内を案内してもらいながら、八神はやてに受けていた。

――因みにスバル、ティアナは早朝の訓練があるから、シャマルは医務室を離れるわけにはいかないから、と部屋を出たところで別れた。

「ところで俺の――…デバイスとやらは？」

施設の大半を案内してもらったところで、藪から棒にマグナがそう訪ねると、はやては何かに気付いたように立ち止まる。

そしてマグナを振り返って頭を斜め上へ。それにつられる形で視線を動かすと――。

「――…デバイス、ルーム？」

「せや、ここに預けとる。それと悪いけど簡単な検査もさせてもらいました」

「構わないさ。どうせ俺が見たって判らないし、弄った途端ドカッ！　なんてゴメンだしな」

「それはさすがにありませんよ……」

そう苦笑しつつ部屋のドアを開けて室内へと入るはやてに倣い、マグナもドアを潜る。

「へえ、こんな風になってるんだな……」

ほう、とかふむふむ、とか言いながら室内を見回すマグナに、やっぱり男の子で機械的なもんが好きなんやろか、と思いつつ部屋の主の名を呼びながら奥へと進む。

が、返ってくるのは沈黙のみである。

「シャーリー！ おらんのかあ？」

「……………いないのか？」

「いや、そんなはずは……」

言いつつ更に奥へと進むと、程なくして管理局指定の制服に身を包んだ長い茶髪の女性を見つける。

「おったおった……」

呟き、すつ…と腕を振り上げながら近づき、射程圏内にその無防備

な後頭部を捉える。
と同時――！

「ちょいさあ――！！」

「うきやう！？」

チョップ！

哀れ、はやての一撃をまともにもらった茶髪の――恐らくはシャリーなる――少女は頭を抑えて机に突っ伏してしまう。
――因みにはやての後ろではさりげなくマグナが十字を切っていたりするのだが、まあ、それは余談である。

――それはさておき
――閑話休題

くるりと振り返ったシャリーことシャリオ・フィニーノは目に涙を浮かべながら抗議する。

「いきなり何するんですかはやてさーん……」

「声掛けたのに気付かなかったやないか！　そんなら実力行使しかあらへんわ」

「それはそれでどうなんだ……？」

それを無視してさりとってのけるはやてに、とりあえずジト目でツツコんでみるマグナである。

「彼のデバイスはどんなん？」

「あ、はい。 ちょっと待ってください」

が、それさえ無視し――冷や汗をひとすじ掻いていたが――話を続けるはやてに、端末に向き直ってキータイピングを始めるシャリー。

「これといった損傷も機能障害もありませんでした。――よしっ！」

キーボードを全く見ずに端末を繰り、――所謂ブラインドタッチ――最後にエンターキーを押す。

同時、空気の抜ける音と共に調整漕の透明な蓋が開き中身――マグナのデバイスが露わになる。

椅子から立ち上がって近づき、それを取り出したシャリーがマグナへと手渡す。

「はい、どうぞ」

「ああ、ありがとう」

『おはようございます、マスター』

「お、おう。えゝ、と……」

『……………どうなさいましたか、マスター？』

丁寧な手つきで差し出された己が愛機を礼を述べつつ受け取った。

……のはいいが、どうも歯切れが悪い。そんな主を訝しみ、恐る恐る訊ねてみる彼のデバイス。心なしか台詞と同時に点滅する光も不安げに見えなくもない。

そんな彼女に、マグナはしばしの沈黙を経てこう答えた。

「……………名前、なんだっけ？」

「『……………』」

もちろん彼女たちも沈黙をもって応えた。…………ジト目つきではあるが。

-
-
-
-
-

デバイスルームでの一件の後、はやてと別れ、フォワード達のデバイスのデータ採取に行くというシャーリーと共に屋外にあるという訓練施設に向かったマグナ。

廃棄都市を模したそのステージの上空では、桜色の光が通った軌跡を寸分違うことなく橙色の光球が貫いていく。更に青い光と金色の光が、直線的に、或いは鋭角的に、また、時にはフェイントを織り交ぜて桜色の光にぶつかっていく。

青、橙、金の方は時折、明らかに速度や一撃の威力が上がっていることから補助を受けているらしい。つまり、実質一対四だが、桜色は一歩も譲らず寧ろ圧倒しているようさえに見える。

「……………」

「あ、やってるやってる」

そんな光景に言葉もないマグナとは正反対に慣れたもので、シャーリーは持参した小型の端末と据え付け型の端末を操作してデータの採取を始めている。

「どうです。何か感想は？」

「あ？ ああ……………」

キーボードを叩きながら、マグナを見て軽い調子で訊いてくるシャーリーに曖昧に頷き、視線を釘付けにされたままポツポツと答える。

「なんというか、凄いな。 あんたらの云う魔法てのは、こんな事ができるんだなっ、て。 . . . それに……………」

「……………それに?」

興味深げに続きを促すシャーリーに苦笑し、未だ空を舞う桜色の光を見つめる。

「あんな風に自由に蒼空そらを飛べたら、気持ちいいんだろうな……………」

「……………そうですね……………」

どこか憧憬を込めた眼差しで呟くマグナにシャーリーは微笑むと、静かにそう相槌を打ったのだった。

そうこうしているうちに早朝の訓練は終了し、各自バリアジャケットを解除してシャーリーのもとへ歩いてくる。

「お疲れ様、シャーリー」

「はい、なのはさんもお疲れ様です。 みんなもお疲れ様」

先頭を歩く長い茶髪をサイドポニーにしたやや長身の女性が声を掛けてくると、ちょうどデータの採取を終えたシャーリーも笑顔でそう返す。

『『お疲れ様です……』』

澁刺としたなほという女性とは対照的に、先のスバル、ティアナを含む四人はややお疲れ気味のようだ。

――まあ、朝からあんなハードな訓練では仕方ないことではあるが。

「大丈夫なのか……？」

「？ あ、昨日の……」

そんな心配げな呟きが聞こえたわけでもあるまいが、なのはがシャーリーの後ろを覗き込むようにしてマグナを視界に捉える。

「高町なのはです、よろしく」

人懐っこい笑みを浮かべ、手を差し出してくるなのは、一瞬キョトンとするも直ぐにその手を握り返す。

「マグナ・シグザウエルだ、よろしく。で、こっちは・・・」

『“ストレイフェザー”です。気軽にフェザーとでもお呼びください』

と、マグナを遮って、自身の名を強調しながら名乗り出すフェザー。

「えっ、と、どうしてフェザー…は不機嫌なの？」

「あゝ、えーと、ですね・・・」

その様子に小首を傾げるなのは、シャーリーが苦笑しながら先程の一件を掻い摘んで話し始める。

「にやはは、ダメだよマグナ君。相棒の名前くらいちゃんと覚えてあげないと」

で、今の言である。

その話に親近感を抱いたのか、なのははいつの間にか普通に喋っていたりする。

「返す言葉もないよ……」

『まったくです。レディの名前くらい覚えてもらわなければ困りますよ？ マスター』

「お前って結構根に持つのな……」

が、マグナは別段気分を害した風もなくストレイフェザーとコントのようなやりとりなんぞを交わしては、フォワード達から苦笑されたりしている。

「ところでそっちの二人は？」

何とか自分に不利な空気を変えようと未だへばっている赤い髪の少年と桃色の髪の少女に視線を移す。

「あ、はい！ 自分はエリオ・モンディアル三等陸士であります！」

「同じくキャロ・ル・ルシェ三等陸士であります！」

「改めて、マグナ・シグザウエルだ。よろしくな」

『ストレイフェザーです。以後お見知りおきを』

『はい！ よろしく願いします！』

自分に話が振られたと見るや、背筋を伸ばしてきちんと名乗る年少組。そんな二人に感心しつつ、しゃがんで視線を合わせながら名乗り返すと元気に返事をしてくれる。そんな光景を微笑ましく見ていたのはが、いつまで経っても名乗らない年長の二人を訝しんで疑問を飛ばす。

「あれ？スバルとティアナはいいの？ 挨拶しなくて」

「はい。昨日助けてもらったお礼がしたくって、今朝」

「私はその付き添いで」

そう言う二人になのはは納得したように頷くと、話を纏めるべく声を張り上げる。

「じゃあみんな、お互い自己紹介が終わったところで朝ご飯にするよー」

「じゃあお先です！」

「ちょっと、待ちなさいよスバル！　すみませんのはさん、また後で！」

よほど空腹感に苛まれていたのか、なのはの言葉を聞くや否や諸手をあげん勢いでスバルが駆け出し、その後を追うようにティアナもまた駆け出す。

「じゃあわたしたちも行こう、エリオ君」

「うん、って引つ張らないでよキャロ！　お、お先に失礼します！」

そう言って去っていく年少組に軽く手を振って見送ったなのははマグナを振り返って問う。

「私はご飯の前に簡単に書類纏めなくちゃいけないから案内できないけど、マグナ君は食堂がある場所はわかる？」

「ああ、ここに来る途中で寄ったから大丈夫だ。それに、いざとなればコイツにナビゲートしてもらうしな」

言いつつ、待機状態のストレイフェザーをつまみ上げる。　　が、肝心の彼女はというと・・・

『レディの名前を忘れるような方を私がナビゲートするなどと思

いですか？ マスター』

「だってよ、マグナ君？」

仮に人間であればそっぽを向いたであろう口調になのは面白そうに便乗し。

「本っ当に根に持つのなら、お前は……」

そんなひとりと一機に対して漏れた溜め息が、青空に虚しく吸い込まれて消えていった。

第三話 新たなる“日常”（後書き）

どうも、最後までお読みいただき感謝であります♪

さ、前置きはこれくらいにして、アンケートに移りたいと思います。
で、肝心の内容なのですが。

ズバリ、ヒロインを誰にするか！ ……なのですよ、ええ（汗）

まあ、そんなわけで（どんなわけ？）是非、お願い致します m（
ーー）m

概要はこちら

・ヒロイン候補

A・高町なのは

B・フェイト・T・ハラオウン

C・八神はやて

D・スバル・ナカジマ

E・ティアナ・ランスター

F・ギンガ・ナカジマ

以上の六名の内の誰か一人。

・ハーレムを、という方もいらっしゃるかも知れませんが拙作ではお断りさせていただきます。

申し訳ございません。 m (| |) m

・副隊長二人とナンバーズは除外とします。 自分には書ききれぬ自信がありませんのでこちらに関しても悪しからず。

・投票に関してはお一人一位ゝ三位までを決めていただき

一位 三ポイント

二位 二ポイント

三位 一ポイント

これらの総合ポイント数で正ヒロインを決めさせていただきます。
なお、誠に勝手ながら締め切りは次回の更新時（恐らく六月の中頃）とさせていただきます。

お手数ではありますが、沢山のご応募お待ちしております♪

ではでは♪

第四話 初デートは騒動とともに（前書き）

読者の皆様、お久しぶりでございます♪

ようやくと更新です。 毎度毎度お待たせして申し訳ない（汗）
色々謎をほったらかしたまま話しは進みますが、いずれ説明してい
きたいと思います。

あ、アンケートについては後書きにて。

では、どぞ♪

第四話 初デートは騒動とともに

・・・青年は、眼前にある“それ”に困惑していた。

「なん、なんだ……。この、」

“それ”は細く、長く・・・

「この、」

束になり、とぐろを巻き、山の如く堆^{うすたか}く積み上げられている、
“それ”は・・・

「この山盛りのナポリタンは……!?!?」

そんな叫びが木霊したここ、機動六課食堂では今、まさしくフオワード達4人が朝食をとっている最中である。

――そして叫び声の主は言わずもがな、マグナである。

「え？　これ普通じゃないですか？」

「まったくもって普通じゃないわよ、これ。　毎朝見てるこっちの方がウンザリするっての」

キョトンとした顔で言っただけなのはスバル。　毎朝というあたりもう慣れたのか、そのスバルに涼しい顔してツッコんだのはティアナだ。当の彼女はキャロと共に食後のお茶を楽しんでいる。

――まあ、それでもナポリタンは大皿にこんもり盛られているのだが。

一体どれだけ食べるというのか、彼女らは消化不良を起こしはしないか、というより毎食こんな調子ではこの機動六課とやらの食堂は赤字になったりしないのか――。

呆れるやら感心するやら心配するやら、複雑な心持ちになりながら彼女らの近くの座席に陣取ると、エリオが声を掛けてきた。

「あの、マグナさん。　一緒に食べませんか？」

そう言って誘ってくれたのだが、正直に言えば件の光景を見ただけ

で軽く胸焼けしていたので丁重にお断りし、カウンターから持ってきた自分の朝食をいそいそと口に運ぶ。

「……ああやって笑いあえる仲間っていうのはいいもんだな」

隣で談笑しながら食事を楽しむ4人を横目に誰にともなく呟く。
時折炸裂するティアナのツツコミを面白おかしく見ていると、唐突に影が視界を遮った。

「ここ、いいかな？」

「ん？」

『おや、先程ぶりですM S . なのは。それと……？』

唐突に降ってきた声に振り向けば、そこにはつい先ほど別れたばかりの女性、高町なのはともう一人。黒衣に身を包んだ長い金髪、赤い瞳の柔和そうな女性が立っている。

「まあな。……で、あんたは？」

「あ、初めまして、だよな。私はフェイト・T・ハラオウン。
よろしくね、マグナ」

「ん、よろしく」

『挨拶ぐらいきちんとして下さい、マスター。 申し訳ありません、
Ms・フェイト。 マスター共々よろしく願います』

「うん、よろしく」

今朝方もしたようなどこかぶっきらぼうな挨拶に気分を害した風もなく、フェイトはにこやかに微笑み、なのはとともに席について食事をとり始める。

「・・・ところでマグナ」

「？ なんだ？」

なのはとフェイト、二人の皿の中身が半分になった頃、唐突にフェイトが聞き辛そうに口を開いたので、口に付けていたコーヒークップを受け皿に戻しながら先を促す。

「その、今後の方針は決まったの？ 路銀も行く当てもないって聞いたけど」

『ついでに記憶と愛想もありませんが』

「おい……。 まあ、なんだ……………」

余計な茶々を入れてくるストレイフェザーを指で弾いて黙らせると、そのまま腕を組んで考え込む。

「……もう少し考えてみる」

「うん、分かったよ」

「時間はあるから、ゆっくり考えて」

「ああ、そうさせてもらっ」

しばらく考えて出した答えにならない答えに怒ることも、焦らせる事もなく笑顔で応じてくれる二人に感謝しつつ、マグナは温くなったコーヒーに口を付ける。

「でも、当面は六課にいるんですね？」

マグナ達の話が聞こえていたのか、そう訊ねるキャロに首肯してみせる。

「だったら日用雑貨、買つとした方がいいよね。付き合って上げられたら良かったんだけど、教導あるしなあ」

頬杖をついて嘆息するのは。教導がある、ということは必然的にフォワードの4人も無理、となる。

「私でよければ付き合うよ？ マグナ」

「そりゃありがたいが、仕事はいいのか？」

プチトマトを口に入れつつ、そう提案してきたフェイトに質問で返す。

「うん、丁度午後から非番だから。 マグナがそれでいいなら」

そうまで言われれば、マグナ本人に断る理由があるはずもなく。

「分かった。じゃあ、頼む」

「うん。あ、運転は任せて」

『初デートの相手がMs・フェイトのような美人とは。 マスターもついてますね』

「ふえ！？」

「おい、こら！？」

「にはやは、よかったねえフェイトちゃん？」

「な、なのはあゝ……」

かくして、マグナとフェイトの突発的デート…… が、ここに決まったのである。

-
-
-
-

機動六課隊舎 ロビー

決して少ない人が出入りする中、マグナは腕を組み、ロビーに設えてあるソファーに埋もれていた。そして時計を見て、一つ溜め息。

「……遅いな」

『お忙しそうな方ですから。仕方ありませんよ』

「まあ、判っちゃいるが、な」

呟き、再び溜め息。 背もたれに背を預けて缶コーヒーを呷る。
約束の時間からかれこれ30分、そんな事を続けているが、一向に

待ち人が来る気配がない。

――時間と場所間違えたか？

一瞬、そんな不安に駆られるも、それはない、と頭を振って否定する。

場所も時間も向こうが指定し、且つ、それを本人の口から聞いたのだ。間違えよう筈もない。

「やっぱり仕事が長引いてるのか……？」

言いつつ、再び缶コーヒーを呷るも、中身は殆ど空だ。そんな事にも気付かないほど上の空だった自分に苦笑しつつ、ただの鉄屑と化したスチール缶を持って立ち上がる。
と――。

「ごめんマグナ、待たせちゃった」

「30分やそこらならどうってことないさ」

申し訳なさそうな顔をしながら近付いてくるフェイトに若干苦笑しつつ切り返すと、その端正な顔に笑みを浮かべる。

「優しいね、マグナは」

「……茶化すなよ／＼／」

『照れてるんですか？ マスター』

「だから茶化すな……」

またもや茶々を入れるストレイフェザーに、疲れたように言葉を返すしかできないマグナであった。

そんなこんなで漸く辿り着いたミッドチルダ首都、クラナガンのあるショッピングモール。

首都最大の規模を持つここであれば、今回購入するものならこの一カ所で済ませることができる。

更に付け加えればこの中では何軒もの食事処が軒を連ねている為、何を食べるか迷いはするが、広大な首都圏を目的の店を探してさ迷う必要もない。

とはいえ、それこそ万物《何でもかんでも》揃っているわけでは、決していないが。

それはさておき
- - 閑話休題

マグナとフェイトは先に、さしたる荷物にはならない衣類から購入することにした……のだが。

「うーん」

「どうしたもんか」

マグナに合う服がなかなか見つからずに絶賛お悩み中なのである。

別に、マグナとしては着れば何でもいいのだ。故に先ほどその旨フェイトに伝えたのだが、『似合う服を着るのに越したことはない』という、ある意味至極真つ当な意見を言われ、閉口するに至る。

で、その後も裕に30分は悩みに悩み抜いた末、二択に絞り、先ほどからマグナの上半身に合わせるようにして吟味している。

そして……

「うーん、うん。こっちにしよう。　マグナもこれで良いかな？」

「ああ、もう、それで、いい………」

「じゃあお会計済ませてくるね」

「おーっ………」

どこか楽しげにレジへ向かうフェイトの背に軽く手を振って見送り、一息つく。
そしてふと気になったことを、自身の首に掛けている相棒へと訊ねてみる。

「……なあ、フェザー？」

「？ 何でしょうマスター」

「なんとなく、フェイトが楽しむのに付き合わされた感があるんだが、気のせいかな？」

「……………気のせいです」

「今の間はなんだ！ 今の間はあ！？」

彼女が人間であれば、恐らく目が泳いでいたであろう返答にすかさずツッコむマグナ。しかし敵（？）もさるもの、マグナにとって予想外の方向から切り返してきたのだ。

「……しかし、何だかんだでマスターも楽しそうでしたよ？」

「なっ！ ……そんな、ことは、……ない」

「では今の間は何なのですか？ 今の間は？ それに頬が朱くなっています」

「う……」

華麗なる意趣返しにぐうの音も出ないマグナ。 遂には鼻を鳴らしてそっぽを向いてしまう。 頬を朱らめたままで。

「お待たせ。 ……どうしたの、マグナ？」

「い、いや、何でもない！」

と、会計を済ませたフェイトが近寄り様、 頬が朱いマグナを訝しんで顔を覗き込むようにして様子を窺う。

それをソニックムーブもかくやというスピードで避け、 顔を背けて距離を取るマグナ。

「ど、どうしたの？」

突飛な行動をとったマグナに小首を傾げながら訊ねるフェイトに、 ストレイフェザーがまるで思い出し笑いをするかのような口調で答える。

『いえ、マスターはMs・フェイトの事がすk……』
「今この場でスクラップにしてやるうか？」

『……ノーサンキューです、マスター』

「分かればいい。さて、どこかで昼飯にするか」

「あ、う、うん……？」

何やら物騒な物言いでストレイフェザーの発言を遮ったかと思えば、店内の案内板を頼りにさっさと背を向けて食堂のあるフロアへ歩いていってしまう。

「??? ねえ、バルディッシュ。私何かしたかな？」

『…分かりかねます』

そんなマグナに愛機共々疑問を抱きながら後をついて行くフェイトであった。

- - -
- - -
-

その後、やや遅めの昼食を済ませ、消耗品や細々とした雑貨を購入した二人は荷物をフェイトの車に置き、マグナの案内も兼ねて街中を散策することにした。

「にしても人が多いな。　クラナガンてのはいつもこんなのか？」

「うん。　夜でも人通りはそう変わらないかな」

「へえ、眠らない街って感じだな」

「ふふ、そうだね」

そんな雑談を交わしながら、おのぼりさんよろしく景色を見回す。

とはいえ360度、どこを見ても目にはいるのは高層ビルにファーストフードやファミレスなどのチェーン店ばかりだ。

あとは、ビジネスホテルやマンションが散見されるくらいか。

「なんというか……その、変わり映えしないな」

「あ、あはは……」

なんて身も蓋もないマグナの一言に苦笑しながら一緒に歩くフェイト。

「ん？　あれ？」

「どうしたフェイト？」

「この通りの向こう側。　ほら、あそこ」

「人集りができてるな。　なにかあったのか？」

フェイトが指さす先、そこには確かに何十人という人が建物の中の様子を遠巻きに、窺うようにしている。

「何があつたんだ？」

「あそこは確か銀行……。　そこに人集り……。　もしかして」

そう呟くや否や、フェイトは近場の横断歩道を渡って人集りへと向かっていく。

「あ、おい！？　待てって！」

その背を追ってマグナも人集りへと向かう。

視線の先では、既にフェイトが人集りの内のひとりを捕まえて事情を問い質しているようだ。

そしてマグナが追い付いたことに気付くと説明をしてくれた。

「……なるほど、銀行強盗か。　しかも一般の客を人質にとつてる、と」

『決して”治安がいいわけではないようですね』

「うん……」

そう呻くように頷くと気落ちしたように地面へと視線を落としてしまふ。

無理もない。自分達の日頃の努力が今、目の前で否定されているも同然なのだから。
だが。

――まったく。落ち込む より先にする事があるだろうが……。

呆れ、溜め息を一つ吐くと左手の人差し指をビッ！ とフェイトに突き付ける。

「フェイト・T・ハラオウン！」

「は、はい！？」

まったく、まったく以て唐突にフルネームで呼ばれ、更には思考の海から引き上げられ、ビクリと痙攣したような反応を返すフェイト。だが、マグナはそれに構わずに人差し指を突きつけたまま続ける。

「今あんたがすべきは落ち込むことじゃない。違うか、“執務官殿”？」

「あ……」

そう道中で聞いたフェイトの、その役職を口にするマグナ。

そこに、何かに気付いたような反応を示すと同時、見る間にその表情は引き締まっていく。――執務官の表情へと。

「うん、そうだね。今、私がすべきは――。ありがとう、マグナ。マグナはやっぱり優しいね」

不意に笑みを浮かべてそう言うフェイトにマグナはぐっと言葉に詰まり。

「だから茶化すなよ……」

それでも、なんとか憎まれ口を叩いてみせる。

そんなマグナに構わず踵を返したフェイトは人垣を掻き分けるようにして進んでいく。そしてその背はあっという間に見えなくなってしまった。

「さて、と」

その姿を見送ったマグナもまた人集りに背を向けて何処かへと歩き始めた。

そんな主にストレイフェザーが焦ったように疑問を呈する。

『マスター、どこへ行かれるのですか？』

「社会見学しに行く」

『え？』

あっけらかんと答えたマグナに間の抜けたような返事しかできないストレイフェザーであった。

-
-
-
-

人混みを避けて銀行の裏手へ回ったマグナは行員用のドアの前へと立つ。

『……不法侵入になるのでは？』

「非常時に不法も無法もあるか」

不安げに訊ねる相棒の疑問をバツサリ両断するマグナ。

- - - 言っている事は支離滅裂であるが。ともあれ、施錠はされて

いなかったのであっさりと侵入を果たす。

「不用心だな。 まあ、俺としては助かるが」

『（裏口から侵入するような社会見学つて一体………）』

これには流石のストレイフェザーも閉口せざるを得ないらしい。
黙したまま揺られることにした。

そんなこんなでロビーを見渡せる位置まで辿り着いた一人と一機は
その場にしゃがんで様子を窺う。

「犯人は一人、ナイフを持ってる。 人質は小さな女の子が」

『M S・フェイトが説得していますね。 しかし犯人は昂奮してい
るのか、聞く耳をもたないようです』

ロビーをざっと見回したマグナ達は状況を把握する。

幸い、というべきか単独犯であるためにこちらの動きは気取られて
いない。

人質の娘は気丈にも泣きたいのを我慢しているようだ。

ただ、その母親と思しき女性は冷静さを失っており、何がきっかけ
でパニックに陥るか分からないのがネックか。

『どうするのですか?』

「そうだな……。とりあえず……」

声を潜ませ、物陰に隠れながら徐々に強盗犯へと近付いていく。
そして無駄にデカい声がよく聞こえる所まで移動し、完全に死角になる位置で再びしゃがみ込む。

「まずはこっちに気を引き付けなとな。　そう言うわけで頼む」

『はい、マスター。　……………つて、え?　ちよつと?』

ストレイフェザーがなにやら喚いているのにも構わず、マグナは胸の前で十字を切ると、相棒を首から外してソロリソロリと立ち上がる。

「マグナ……!?!」

「ああん!?!」

視界に入ったのだろう。驚きに目を見張るフェイトとそれに釣られてこちらを振り返る強盗犯。
そんな男に向けて振りかぶり……

「逝ってこい!!」

投擲!

『マああううタアアアア!!!!?』

まさに豪速球! 放たれたストレイフェザーは悲鳴(呪詛とも言っ)
を上げながら大気を裂き、風切り音を奏で、寸分変わらず強盗犯の眉
間へと吸い込まれるようにして直撃!

「!?!」

そのダメージ、いかほどのモノだったのか……。哀れ、強盗犯
は悲鳴を上げることかなわずに床に昏倒したのである。

男が登場してから僅か一分足らずの出来事であった。

人、それをこう呼ぶ。

……『出落ち』と。

- - -
- - -
-

「・・・というわけなんだ」

『なるほどな。了解や、フェイトちゃん。お疲れさまな』

強盗騒ぎが解決した直後、はやてからフェイトの安否を確かめる通信があつた。

その表情からは安堵と労いが見て取れる。

『人質さんが居たけど無事なんですよね。どうやったんですか？』

リンフォース？（ツヴァイ）・・・リンの愛称で親しまれているはやてのユニゾンデバイス・・・がそうフェイトに訊ねる。

「うん、それがね・・・」

水色の瞳に好奇心を目一杯に浮かべながら訊ねるリンに苦笑しつつ、先程マグナ本人から聞いた事の顛末を語って聞かせるフェイト。

それに『へえ』と驚き、時に感心したような表情をしながら聞き入るリン。

だが、話が終盤――すなわちデバイスをぶん投げるくだりに差し掛かると――。

『ゆ、ゆる、許せないです〜〜〜〜！！ 魔導師の命とも言えるデバイスをな、投げるなんて何をつ、何を考えてるですかあ〜〜〜！！！！！！！？』

『ちょ、ちょお落ち着きリイン！？』

『これが落ちていてられるですかあ！？ 処刑です、断罪です、（自主規制）ですう！！！！』

「『それはやりすぎだから！！？』」

リインの物騒な叫びに揃ってはやとフェイト……と話の途中で部隊長室に入ってきたのであるのはまで揃ってツッコミを入れる。

話が分からないはずなのはさえ即座に突っ込むのは流石親友達と言うべきか否か。

「と、とりあえず引き継ぎ済ませたら戻るから！」

『了解や！』

『また後でね！』

『あ、まだ話は――』

途中で通信を切断。これ以上話を続ければどんな物騒な単語が飛び出すか分からないので賢明な判断といえよう。――今頃リインを必死に抑えているであろう親友二人が気掛かりだが。

「えっと、マグナは……」

気を取り直し今回の事件解決の立役者（或いは単なる乱入者）たるマグナを探すフェイト。しかし対象は探すまでもなくすぐさま見つかった。
何故なら――

「ふざけるなあ……!!」

「いや、ふざけてはないって……」

目と鼻の先で近隣部隊員の尋問を受けていたからである。
フェイトは即座にふたりの下へ駆け寄る。

「すみません、彼がご迷惑をお掛けして!」

「おい、なんなんだこの男は……って、ハラウン執務官!?
し、失礼しました!!」

「お気になさらず。――で、彼。マグナ・シグザウエルの事

情聴取は六課がします」

「は？　しかし……」

『現在彼はマスター達が保護しています。　これ以上の理由が必要でしょうか』

「……わかりました。　お願いします」

局員はフェイトの説得に難色を示すも、バルディッシュの補足で不承不承了解してくれた。
そんな彼女に感謝しつつ、マグナとフェイトは元来た道を辿って六課へ帰るのだった。

なおその道中、強盗犯に投げつけられた恨みを晴らさんと、某デバイスが主を弄くり倒したことは、特筆に値しない。

第四話 初デートは騒動とともに（後書き）

前置きはすつ飛ばしてアンケート結果を発表します。

えゝ、結論から申し上げますと。

一票も集まりませんでしたゝ！（え）

うん、ちよつと泣きましたよ、ええ。

ま、まあ。そういうワケで期限を延長したいと思います。 今回
はそれなりに票が集まるまで締め切らない方向でいこうかと。

では皆様、何卒ご協力のほど、お願いします m（――）m

うーん、いつそヒロインなしも候補に入れようか知らん……。

ではでは♪

追記：投票は感想、またはメッセージボックスの方へお願いします
m ((m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5173p/>

魔法少女リリカルなのはStrikers ～天空を舞う銃騎士～

2011年10月7日03時54分発行